

「無縁社会 ～無縁死 3万2千人の衝撃～」を見て

最近多くなってきている「孤独死」問題については、先に当 HP 記事（HP「雑学 BN」のマスコミ等コメント関係（IV）、2007.11.23.『“天国への引っ越し”手伝います』を見て：参照）で触れたことがある。

先日、国の統計上ではカテゴライズされない「無縁死」と言われる新たな死についての取材番組「無縁社会 ～無縁死 3万2千人の衝撃～」を見た。

放送局の取材班が独自に全国の市町村に問い合わせた結果、身元が分からなかったり、遺族が引き取りを拒否した「無縁死」が、年間3万2千人という実態が明らかになったとか。

番組では、無縁社会は、かつて日本社会を形作っていた家族・親類との「血縁」や地域との「地縁」の絆の喪失に加え、終身雇用が壊れ、会社との絆であった「社縁」までが失われたことによって生み出されていると、時代背景を分析していた。

そうした世相の必然性からか、社会との接点をなくした人々向けに、死後の身辺整理や埋葬などを専門に請け負う特殊清掃業や NPO 法人がここ2～3年で急増の実態。

また、無縁死に対して今や自治体が対応することも難しい中、自治体の依頼や将来の無縁死を恐れる多くの人からの生前予約などで需要が高まっていることにも、一年かけて事例を取材し紹介していた。

血縁が疎遠になることには他人が入り込む余地のない理由（わけ）があろうかと思えるが、「隣は何をする人ぞ」というような地縁が疎遠になる地域社会の意識や利潤と効率の追求のために終身雇用が壊れての結果としての「無縁社会」は今後更に拡大するということが…。

何よりも大切な「いのち」が軽んじられて行く我々の社会、国のあり方とはどうあればいいのだろうか、「無縁死」はそのことを我々に問いかけているように思う。

「無縁死」を避けるためにも、当 HP でも何度も触れているが、「生きる喜びとは、人と係わり合う喜び」であり、社会とはそのための互いの助け合いのシステムとして存在し得るものであることを、今一度再確認し、日頃から人との絆に努めたいものである。

追記

- ・無縁：死後を弔う縁者のないこと（常用字解辞典から）。
- ・行旅死亡人：身元不詳死亡者は法的には「行旅死亡人」と呼称され、地方自治体が遺体を火葬し遺骨として保存し、引き取り手を待つために官報（日本国の機関誌）に掲載することが義務付けられている。